

# 新渡戸稲造における修養論の位相 — 包摂と排除の視点から —

伊 藤 敏 子

**Inazo Nitobe and character development:  
A Luhmannite analysis**

**Toshiko ITO**

## Abstract

Inazo Nitobe (1862-1933), known in the West as the author of *Bushido: The Soul of Japan* (1900) and as a high-ranking League of Nations official (1920-1926), sought to mediate between the West and the East by building “a bridge across the Pacific Ocean”. In Japanese education, he contributed toward establishing a new style of character development named “shuyo”, which was designed to instill “culture” or “Bildung” through the reading of Western literary classics; This approach was widely adopted among the next generation of educators under the name of “kyoyo”. As an educator, Nitobe was practising this approach across the full range of Japan’s social strata, but current academic opinion is divided as to whether he managed to exert a unifying influence on the country’s social divisions. This paper examines Nitobe’s educational legacy from a systems theory perspective, applying Niklas Luhmann’s (1927-1998) reassessment of the inclusion / exclusion relationship.

## 1. はじめに —新渡戸と国際精神—

新渡戸稲造（1862-1933）はしばしば「忘れられた偉人」<sup>1</sup>と称される。1981年に新札の顔として福沢諭吉（1834-1901）・新渡戸・夏目漱石（1867-1916）の名があがったとき<sup>2</sup>、新渡戸が福沢および夏目とは対照的な知名度の低さゆえに注目されたという事実は、戦後日本において新渡戸が忘れられた存在

<sup>1</sup> これは新渡戸研究者に通底する認識といえる。草原克豪によれば、新渡戸は「偉大な業績を残し」ながら「国民から忘れられた人物」（草原 2012、3 頁 参照）であり、ジョージ・オーシロによれば、新渡戸は「偉大な学者という定評を得、日本を世界に知らせる第一人者とみなされ」ながら「一般大衆にはすっかり忘れられ」た人物（オーシロ 1992、2 頁 参照）である。

<sup>2</sup> 当時の報道によれば、紙幣の肖像を従来の政治家路線から文化人路線へ転換するという方針のもと、文化人のなかから「日本における知名度の高い人物」、さらに「世界の通貨 YEN に相応しい国際性を兼ね備えた人物」という基準に照らし合わせて候補者を絞り込んだ結果、福沢・新渡戸・夏目の三者に落ち着いたとされる（「聖徳太子 辞任の弁」『朝日新聞』1981 年 7 月 8 日 参照）。なお、新渡戸の選定については、予定されていた女性の肖像が採択されなかった事情から、女子教育推進者でもある新渡戸にその埋め合わせとしての意味が付与されたという解釈も存在する（「お札人事の舞台裏」『朝日新聞』1981 年 7 月 9 日 参照）。三者は西洋の知見を教育活動を通じて開国間もない日本の高等教育機関へ還元する過程で接点を有する。札幌農学校で学び国粋主義を唱道する地理学者として知られる志賀重昂（1863-1927）が「日本の過去の教育者は福沢諭吉であるが、未来の教育者は新渡戸稲造」（草原 2012、287 頁）であるとして新渡戸と並び立つ代表的教育者とみなした福沢は「日本文明の教育」という側面から新渡戸が最大級の賞賛を与えた人物であり（1911：全集 7、57 頁 参照）、東京帝国大学生時代の新渡戸が成立学舎の生徒として出会った夏目は（草原 2012、105 頁 参照）1906 年から 1907 年にかけて第一高等学校と東京帝国大学で新渡戸の同僚となる。ちなみに、夏目は教育者という肩書を嫌悪したことで知られるが（柴田 2007 参照）、ケーベル（Raphael Koeber, 1848-1923）とともに教養主義の形成という潮流に関与したことにかんがみると、その教育者としての功績は看過されてはならないだろう。

であることを改めて印象づけることになった<sup>3</sup>。

新渡戸研究の変遷を概観すると、新渡戸が新札の顔として紹介された1981年時点で研究対象として注目されていたというよりは、1981年に新札の肖像に選定されたことをきっかけとして研究対象としての新渡戸への注目度が高まったことがうかがえる。1984年の新札の発行を機として新渡戸の生誕地である盛岡に発足した盛岡新渡戸会は、1992年に新渡戸稲造会と改称されると同時に—今日にいたるまで新渡戸研究の安定した発表の場として機能している—一年刊研究誌『新渡戸稲造研究』（2007年の第16号からは『新渡戸稲造の世界』と改称）を創刊する。2014年9月末時点で国立情報学研究所の学術情報データベース（CiNii）には610件の新渡戸研究の論文が登録されているが、新渡戸が新札の肖像に選定される1981年までは1年あたり0件ないし1件ないし2件にすぎなかった論文数が、1982年には増加に転じ、1990年代末以降は1年あたり10余件、2004年以降には1年あたり30件台と50件台のあいだという高い数値で推移している。2004年に5000円札に樋口一葉（1872-1896）の肖像が選定されたことで新渡戸の肖像が日常生活から姿を消して10年となる現在も、新渡戸研究に特化された研究誌への掲載論文を中心として新渡戸研究の論文数が下降に転じる兆しはない<sup>4</sup>。

日本で浸透した新渡戸の標識は—新札の肖像に選定される根拠のひとつとなった—国際性である。新渡戸の履歴そのものを国際志向の表出と受け止めることも可能であるが<sup>5</sup>、新渡戸自身による国際志向の表明としては—新渡戸の枕詞さながらに定着した—「太平洋の橋」<sup>6</sup>というフレーズが広く知られている。西洋と東洋を架橋する志は執筆活動において、また国際機関での活動において発揮される。西洋における日本理解の一助として英文で上梓された著作『Bushido - The Soul of Japan』（1900）は、日清戦争・日露戦争の勝利により日本が西洋で注目されたことを追い風として多くの読者を獲得する。アメリカ留学中ともに学んだアメリカ大統領ウィルソン（Thomas Woodrow Wilson, 1856-1924）の提唱を

<sup>3</sup> 新渡戸が偉人でありながら忘れられた理由を、新渡戸研究者は新渡戸の業績の多面性に帰することが多い。新渡戸が後世に名を残すことが難しかった理由として、草原は「新渡戸はあまりに多岐にわたって活躍したので〔中略〕全体像をつかむのはなかなか容易でない」（草原 2012、3頁）ことを挙げ、オーシロは「非常に多忙のため、風雪に耐えて生き残る著作を残すことができなかった」（オーシロ 1992、2頁）こと、戦前エリートに共通する運命として、戦後「彼の国際貢献を評価する学者が少なかった」（同書、3頁）ことと並べて「多くの非常に異なった領域の仕事に携わったため〔中略〕特定の活動や組織に結びつけにくい」（同書、2頁）ことに着目している。しかし、福沢・新渡戸・夏目の生涯の業績の比較にかながみる限り、新渡戸が「忘れられた偉人」になっていた事実を新渡戸の業績の多面性にのみ帰することは説得力に欠ける。留学後自らの設立した慶応義塾で教育に携わる一方で、文筆家として、そして国家の文教政策にも影響を与える啓蒙運動家として活躍した福沢、留学後札幌農学校、京都帝国大学、第一高等学校、東京帝国大学等で教鞭をとりながら、文筆家として、そして国際連盟や太平洋問題調査会といった国際機関でその名を高めた新渡戸、留学後早々と東京帝国大学における教鞭を返上して朝日新聞社に入社、小説家として成功を取めた夏目、と多様な領域への関わりという事情は三者に共通している。

<sup>4</sup> 新渡戸研究の論文数が飛躍的に上昇した2004年から2013年の10年間に限定すると、総件数426件のうち半数以上の240件が『新渡戸稲造研究』とその後続誌『新渡戸稲造の世界』に掲載された論文である。

<sup>5</sup> 新渡戸は国際性に浸された人生を歩んだ人物であった。東京さらに札幌で英米の教師のもと10年以上にわたり英語漬けの少年時代を過ごした新渡戸は、1884年から1887年にはアメリカに留学滞在（アラゲイニ大学、ジョンズ・ホプキンス大学）、1887年から1890年にはドイツに留学滞在（ボン大学、ベルリン大学、ハレ大学）、1898年から1900年にはアメリカに療養滞在、1900年から1901年には台湾の職務に向けた海外視察、1901年から台湾に勤務滞在、1901年から1902年にはオーストラリア等を視察、1911年から1912年には日米交換教授としてアメリカに講演滞在、1919年には後藤新平（1857-1929）に同行して欧米視察、そのまま国際連盟事務局次長として1920年までイギリスさらに1926年までスイスに勤務滞在、1932年から1933年までアメリカに講演滞在、と恒常的に海外との交流に親しみ、人生の伴侶であるメリー夫人はクエーカー信仰を共有するアメリカ女性であった。

<sup>6</sup> 1881年の東京帝国大学入学時に志望動機として挙げた「太平洋の橋」—英語表記では「a bridge across the Pacific Ocean」（1912：全集13、9頁）—というフレーズについての説明を求められ「日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度」（1907：全集6、20頁）と述べた新渡戸であるが、晩年には「太平洋の橋」としての自らの人生を「自ら通訳たるを以て天職と心得ているため、西洋のことを日本語に通じ、日本のことを外国人に了解せしむるだけのことを以て務と信じ、自分で何の研究もなければ、人に勝れた卓見もない、単に甲のいふことを乙に伝へ、乙から学んだことを甲に知らせるだけのことである。従つて、書くものもその時に何かの役をなせば、後世迄伝はらずともと自らは断念している」（1934：全集10、284頁）と述懐している。

受け世界平和維持と国際協力を旗印として発足した国際連盟（League of Nations；略称 LN）では初代事務局次長に就任し 6 年間にわたりユネスコ（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization；略称 UNESCO）の前身である国際知的協力委員会（International Committee on Intellectual Cooperation；略称 ICIC）の設立等に携わり<sup>7</sup>、晩年には環太平洋地域の相互理解と平和関係構築を目的とする太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations；略称 IPR）に日本支部の理事長として名を連ねる<sup>8</sup>。

世界を舞台として様々な活動を繰り広げる新渡戸は、近代日本における国際精神（international mind）を象徴する役割を担っていたといえる。しかし、国際精神を「人に世界的な視野から物ごとを眺めさせるようにする心的態度」（1936：全集 15、281 頁；和訳 全集 19、344 頁）と定義する新渡戸自身は<sup>9</sup>、「私自身のように封建的な城の影の下に生まれ、19 世紀を特徴づけた濃密なナショナリズムの空気の中で育てられた者にとっては、考察することも実現することも困難なものである。われわれは、次の来たるべき世代に対してのみ、真実の国際精神を期待している」（同書、320 頁；和訳 同書、392 頁）と、みずからが国際精神に到達しない運命にあるという認識を示していることは注視に値する。

乗り越えられること、そして忘れられることにきわめて自覚的であった新渡戸の多様な活動のなかで、本稿が取り上げるのは教育における活動である。新渡戸の教育上の功績としては、エリート文化の基調をなす教養主義の礎を築いたこと、そして庶民文化の基調をなす修養主義の浸潤に資したことが挙げられる。エリート階層を対象とする学校教育という枠組みのなかで、庶民階層を対象とする刊行物を介した社会教育という枠組みのなかで、等しく「修養」という語を用いて異なる階層に「人格の向上」を説く新渡戸の教育活動は、封建社会からの脱皮の途上にあった日本で異なる階層に橋を架けることに寄与しえたのだろうか。本稿は、階層（を含む差異）の無化と階層（を含む差異）の強化のあいだを揺れる新渡戸の教育の語りをルーマン（Niklas Luhmann, 1927-1998）の包摂／排除の理論から考察する試論である。

## 2. 新渡戸と教育

1883 年の東京帝国大学入学時に「太平洋の橋」というフレーズで異なる文化に橋を架ける決意を語った新渡戸は、その翌年アメリカのジョンズ・ホプキンス大学で「日本で教育職に就く」<sup>10</sup> ための学究に着手する。留学中の新渡戸は、ヒューズ（Thomas Hughes, 1822-1896）の『トム・ブラウンの学校生活（Tom Brown's Schooldays）』（1857）に描かれたラグビー校校長アーノルド（Thomas Arnold, 1796-1842）に理想の教育者像を見出すとともに、夜学校を含む庶民を対象とする学校を創設する計画

<sup>7</sup> 国際知的協力委員会の設立に関して新渡戸はとりわけベルクソン（Henri Bergson, 1859-1941）、キュリー（Marie Curie, 1867-1934）、アインシュタイン（Albert Einstein, 1879-1955）を構成員に獲得した功績によって高く評価されている。

<sup>8</sup> 環太平洋地域の経済・貿易・人口・人種問題などを調査研究して意見交換することで共通理解を促進し平和に寄与することを目指して 1925 年にホノルルに設立されたこの民間の国際学術研究団体で 1929 年に日本支部の理事長に就任した新渡戸は、同年京都で開催された第 3 回太平洋会議に議長として参加して以降、1931 年には上海で開催された第 4 回太平洋会議、1933 年にはバンフで開催された第 5 回太平洋会議に出席している。

<sup>9</sup> 新渡戸は国際精神を国家精神（national mind）の延長線上に位置づけるとともに、国家精神から遊離した世界市民精神（cosmopolitan mind）とは厳格に区別する（1936：全集 15 358 頁；和訳 全集 19 442 頁 参照）。新渡戸は、自身の目指す国際精神が国家や国民ないしは祖国や国籍という観念と親和性をもつ概念であること、そしてまさにこの観点において世界市民精神や普遍精神に対置される概念であることを繰り返し説き、国家や国民という観念の欠落をもたらす事態に対しては「international という言葉から national を取り去ると、ただ inter だけが残る。つまり、『中間』の空間だけが残る、そこにわれわれは落ち込んでゆく！」（同書、320 頁；和訳 同書、393 頁）と警鐘を鳴らす。

<sup>10</sup> 新渡戸はジョンズ・ホプキンス大学入学に際して入学目的欄に「To complete my education and to qualify myself for teaching on my return to Japan」（cf. Furuya 1985, p.43）と記載している。



を温めており（1885：全集 23 422 頁；和訳 全集 22 255 頁 参照）、ここには一異なる文化に橋を架けることにとどまらず一異なる階層に橋を架ける構想が意識されていたことが読み取れる。帰国後、新渡戸は 1891 年から 1898 年には札幌農学校の教授職、1903 年から 1906 年には京都帝国大学の教授職、1906 年から 1913 年には第一高等学校の校長職、1906 年から 1927 年には東京帝国大学<sup>11</sup>の教授職と一連の官立教育機関でエリート教育に関わる一方で、庶民教育に供する遠友夜学校（1894）、キリスト教教育と日本女性教育の一体化を謳う普連土女学校（1887）の創設に携わり、プロテスタント諸教派共同設立の東京女子大学（1918）、河井道（1877-1953）設立の恵泉女学園（1829）、森本厚吉（1877-1950）設立の東京女子経済専門学校（1828）ではそれぞれ初代学長ないし初代校長に就任し、1917 年には東洋協会植民専門学校の学監を務め<sup>12</sup>、1918 年には後藤新平とともに軽井沢夏期大学を開設するなど、さまざまな立場で教育活動を展開している。

新渡戸が教育者として生きた時代は、ひとつには開国の帰結としての近代化の過程で日本の教育が従来の価値体系の根本的な見直しを迫られた時代であり、いまひとつには世界規模で展開した新教育運動が一世を風靡した時代である。20 世紀への世紀転換期に生起した新教育運動は、今日的な見方からは、改革の観点が教育方法論にとどまり教育目的論や教育内容論に及ばなかったこと、ファシズムの揺籃として機能する側面をもっていたこと、さらに教育の対象として想定されていたのが新中間層（ブルジョア）であり一般的広がりをもたなかったこと（堀松 1987、8 頁 参照）、といった時代的限界が指摘されるが、そこで掲げられた理念のなかには今日にいたるまで継承されているものも多い。

新渡戸自身、新教育運動の関係者およびその実践との接点をもっている。長期にわたる国際連盟在任中、新渡戸はジュネーブをその拠点としていた新教育運動の立役者たち、たとえば 1922 年に設立された新教育運動の国際組織である世界新教育連盟（New Education Fellowship）のドイツ語版機関誌『変わりゆく時代（Das wedende Zeitalter）』の編集長ロッテン（Elisabeth Rotten, 1882-1964）らとは寄稿者兼友人として（Ito 2006, S. 104 f. 参照）、フェリエール（Adolphe Ferrière, 1879-1960）とは 1924 年に設立されたジュネーブ国際学校の協力者兼友人として親交を結ぶ。日本国内では日本の新教育運動である大正自由教育の嚆矢となる成城小学校の設立者澤柳政太郎（1865-1927）とは互いに敬意を払う交友関係にあり<sup>13</sup>、成城小学校の確立に小原国芳（1887-1977）とともに携わった小林宗作（1893-1963）にジュネーブで会した新渡戸は彼をダルクローズ（Emile Jacques-Dalcroze, 1865-1950）のリトミック（rythmique）へと導いている。ところで、日本の新教育運動を代表する澤柳や野口援太郎（1868-1941）が教育改革の眼目として注目した「修養」は（渡辺 1997、35 頁 参照）、新教育運動を媒介としながら公教育へも広がりをもせていくことになるが、「修養」はまた新渡戸の一階層を超えて有効な一教育論の真髄をなすものでもあった<sup>14</sup>。

<sup>11</sup> 新渡戸は陸軍大将兄玉源太郎（1852-1906）を記念して政治家後藤新平が寄付を集めて 1909 年に東京帝国大学に設立した一戦争によって獲得した新領地（外地植民地）を射程とする対外的な植民政策を意識した最初の講座となる一植民政策講座の初代の主任となる。北海道開拓といういわゆる内地植民政策を想定した講座はすでに新渡戸の母校である札幌農学校に存在しており、1887 年の校則に記載された「農政学及植民策」という科目に則して 1890 年から 15 年間にわたって佐藤昌介（1856-1939）が「殖民史」と「殖民論」を、多忙となった佐藤を助けて新渡戸も 1894 年と 1895 年に「殖民史」を担当している（草原 2012、309 頁 参照）。新渡戸の東京帝国大学における講義は植民に関する歴史や学説の紹介を主眼としており、経済や政治よりも人的交流に重点をおいた講義であったことが当時の学生の証言からはうかがえる（オーシロ 2012、145 頁 参照）。

<sup>12</sup> 学監就任時に 3 年制であった東洋協会植民専門学校の、1918 年に 4 年制となると同時に拓殖大学と改称される。

<sup>13</sup> 新渡戸が『実業之日本』顧問に就任したとき、澤柳は新渡戸を「その学識の該博なる、その精神の純潔なる、その思想の穩健豊富なる、口を衝いて出づるものは金玉の論、適切の教訓」（澤柳 1908、330 頁）であると称えたうえで、今後この雑誌が「我国の青年に対する健全なる指導者」（同上）としての役割を果たすことを期待している。

<sup>14</sup> 清水康幸は、これが官への追従という傾向を生んだとする（清水 1993、394-395 頁 参照）。

### 3. 新渡戸の「修養」の射程

#### 3. 1. 教養の系譜における「修養」

草原克豪は新渡戸の時代を代表する教育的枠組みとして、忠君愛国といった国家主導の教化、西洋人道主義に基づく教養、東洋的道德思想に基づく修養という三者の存在を指摘し（草原 2012、284 頁参照）、新渡戸の教育理念がこの三つの枠組みに密接に関わっているということを示唆する。ここでは、新渡戸が「修養」という語で説いた—今日われわれが教養という語で理解する—教育理念を概観する。教育者としての新渡戸は、学校教育という場で、そして社会教育という場で、繰り返し「修養」という語を用いて自らの教育論を展開している。教育者新渡戸は巨視的には東洋的封建主義の価値体系から西洋的合理主義の価値体系へと転化する日本にあって教育の新たな方向づけに端緒を拓く教養主義の流れを創出することに関わった人物、微視的には第一高等学校をその校長時代に「修養」に浸すことによって旧制高校における教養文化を生起させることに関わった人物として、教育史上大きな意味をもつ<sup>15</sup>。

日本古来の「修養」主義から分岐するかたちで文明開化期の日本に生起した教養主義は<sup>16</sup>、西洋文化への志向性という進取をもつ一方で<sup>17</sup>、「修養」主義から継承した一勤勉や努力を土台とする—人格の向上への志向性という伝統をあわせもつ（竹内 2003、172 頁参照）。辞書的には「(culture イギリス・フランス・Bildung ドイツ) 単なる学殖・多識とは異なり、一定の文化理想を体得し、それによって個人が身につけた創造的な理解力や知識。その内容は時代や民族の文化理念の変遷に応じて異なる」（『広辞苑』）と定義される教養は、教育理念上は「人格」重視を特徴とする。教養を神聖視する教養主義の思潮は、一般に、「哲学・歴史・文学など人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度」（竹内 2003、40 頁）<sup>18</sup>である旧制高校的教養主義として生まれ、ケーベルおよび夏目漱石の影響を受けた阿部次郎（1883-1959）や和辻哲郎（1889-1960）らを担い手として大正教養主義に達すると理解されているが、筒井清忠は新渡戸が「修養」という語を用いて語った教育論が後に教養という語で定着する教育論を先取りしていた事実を重視する<sup>19</sup>。ただし、教養主義の精華である大正教養主義が一みずからそ

<sup>15</sup> この解釈は筒井清忠に代表されるが、竹内洋もまた教養主義—旧制高校的教養主義—の端緒に新渡戸稲造の第一高等学校校長赴任を位置づけている（竹内 2003、39 頁参照）。旧制高校的教養主義として登場した教養主義の輝きは、大正教養主義を経て戦後も大衆的教養主義として—「教養主義の力—魅力と呪縛」（成田 2013、33 頁）は 1970 年代にはまだ体験可能であったという指摘もあるが—1960 年代半ばまで維持される（竹内 2003、206 頁参照）。戦前の教養主義と戦後の教養主義の連続性、戦後の大衆的教養主義の繁栄、その後の教養主義の凋落という盛衰は（同書、247 頁参照）、竹内によれば、文化格差が教養主義の滋養として作用したことによって引き起こされたものであり、農村対都会、西欧対日本という文化格差の消滅により文化格差が生み出す上昇感という原動力が喪失した時代において教養主義は畢竟解体される運命にあった（同書、204 頁および 218 頁参照）。

<sup>16</sup> 筒井は北原種忠『国民之教養』（1912）において「人格の修養」と「人格の向上」が「当世流行の通語」とされていることに着目し、この時代の「修養主義」が「人格主義」の意で用いられていたとする（筒井 1995、18 頁参照）。竹内もまた、教養主義が修養主義から派生したという説を支持する。竹内によれば、修養一身を修め心を養う—は「克己や勤勉などによる人格の完成を道徳の中核とする精神・身体主義的な人格主義」（竹内 2003、171 頁）として勤勉や儉約といった徳目によって江戸時代中期から民衆のあいだに存在していたが、明治以降は西洋文化崇拜という趨勢のなかで教養主義へと移行していく。

<sup>17</sup> 勝田守一は教養の系譜を内面的人間的価値の実現という「ドイツ的教養概念」とジェントルマンの範型としての「イギリス的教養概念」に求め、両者が「奇妙に交錯しながら、大正期の日本の教養主義を生み出し」（勝田 1973、206 頁）たとする。なお、翻訳語としては、education の翻訳語として「教養」、そして Bildung の翻訳語として「修養」が定着していた状況に、和辻哲郎が「教養」を Bildung との連関で初めて論じその定着に寄与したことが知られている（筒井 1995、88 頁参照）。

<sup>18</sup> 筒井清忠は教養主義を「文化の幅広い享受を通しての人格の完成を目指す思想・生活態度（ハビタス）」（筒井 1995、61 頁）と定義しており、「人格」を教養の核心とみなす理解は竹内洋のそれと通底している。

<sup>19</sup> 筒井はさらに大正教養主義の担い手を夏目漱石、ケーベルに師事した西田幾多郎（1870-1945）、波多野精一（1877-1950）、和辻哲郎らに限定する解釈を相対化し、明治後期に「修養」の名のもと新渡戸に師事した人々が果たした役割を重視する立場をとる（筒井 1995、29 頁参照）。

の潮流に身を置く三木清<sup>20</sup>（1897-1945）の所見によれば一内省的であることをその本質とし「文学的乃至哲学的」（三木 1974、27 頁）で「意識的に政治的なものを外面的なものとして除外し排斥」（同上）<sup>21</sup>する傾向をもつものに対し<sup>22</sup>、新渡戸が「修養」という語を用いて示した教育理念は、形而上的で内省的という点で軌を一にしつつも一したがつて教養の胎動期ないしは萌芽期に位置しつつも<sup>23</sup>—その社会性重視に顕著であるように「非政治的」という点で対置されている事実は留意されなければならないだろう。

「太平洋の橋」を意識する新渡戸は教師として奉じた数々の学校において「修養」の名のもとに、とりわけ西洋文献の読書という文化享受のかたちで人格の完成を目指すという新しいスタイルの教育を確立させる。その一方で、庶民にも同じ「修養」という語を用いながら通俗雑誌等のメディアを介して「修身養心」<sup>24</sup>すなわち「身と心との健全なる発達を図る」（1911：全集 7、23 頁）ことをその目的として「平凡なる日々の務を尽す」（同書、29 頁）に際しての訓示や助言を提供する<sup>25</sup>。早くから異なる文化に住まう人々と交流する機会の多かった新渡戸は、非人格性、そしてそれに由来する道德意識の欠如を日本の抱える問題であると認識し<sup>26</sup>、「人格の完成」、そしてこれを支える「道德性の涵養」を夙に教育の最重要課題として設定しているが、第一次世界大戦はこの連関において「少年たちを善良な男子になるよう教育する代わりに、『忠誠な臣民』になれ『愛国的市民』になれと要求する、愛国心と忠誠心以外により高い義務も徳もないかのよう」（1927：全集 14、462 頁；和訳 全集 18、429-430 頁）な日本の教育の瑕疵を遅ればせながら広く日本人に自覚させ、人格重視の教育を目指すきっかけをつくった出来事と解される。「西欧精神はわれわれの文化に多大の貢献をするであろう。その中でもとりわけ、人格の尊重（appreciation of personality）がある」（1930：全集 16、42 頁；和訳 全集 20、68 頁）と考える新渡戸は、教育の最重要課題と取り組む手がかりを西欧精神に求める。その帰結として、「修養」の名のもと新渡戸はエリート学生に対しては西洋文献の読書を繰り返し勧め、勤労青年に対しては訓話のなかに西洋の挿話を潤沢に織り込む。「修養」という単一の語でエリートの通う学校そして庶民の手にする刊行物で「人格の完成」ないし「道德性の涵養」をいかに目指したのかを、新渡戸自身の語りおよび新渡戸門下生の語りから検証したい。

<sup>20</sup> 古典の読書を重視する教養主義は岩波茂雄（1881-1946）が1913年に設立した岩波書店、具体的にはドイツのレクラム文庫を範として1926年に発刊された岩波文庫によって担われる。岩波文庫の発刊にあたって三木清は「読書子に寄す」と題した発刊の辞を担当しており、この意味で三木の「知識と美とを特権階級の独占より奪い返」し万人のものとすることを指向する教養観はその正統派に位置づけられうる。

<sup>21</sup> 「政治というものを軽蔑して文化を重んじるという、反政治的乃至非政治的傾向をもっていた、それは文化主義的な考え方」（三木 1974、29 頁）である教養は、「非政治的で現実の問題に対して関心をもたなかっただけ、それだけ多く古典というものを重んじる」（同上）傾向があり、これはケーベルおよびケーベルの弟子によって波及される。

<sup>22</sup> 渡辺かよ子は教養の系譜について、阿部次郎（1883-1959）に代表される人格主義的教養主義である大正教養主義が、河合栄次郎（1891-1994）に代表される社会科学的教養主義である昭和教養主義に移行し、これが戦後の一般教養の素地を築いた捉え、大正教養主義と昭和教養主義の非連続性、昭和教養主義と戦後の一般教養の連続性に注目するとともに、昭和教養主義および戦後の一般教養と区別される大正教養主義の特徴として、「現実世界から隔離された思索と読書を通じて」（渡辺 1997、56 頁）獲得されること、そして「非政治的、ナルシスティックで、偽善的独断的なエリート意識の表明」（同上）であることを挙げる。

<sup>23</sup> 筒井清忠は、新渡戸が第一高等学校校長として新入生の歓迎会で「周囲に城壁を築くなく襟懷落々として性格の修養に努めよ」（筒井 1995、21 頁）と語っていることから明らかなように、学歴エリート文化としての教養主義は「修養」という概念で新渡戸校長時代の第一高等学校に始まるとする（同書、24 頁 参照）。「修養」と教養の分岐は、1918年に出された大学令で大学の目的として新たに「人格の陶冶及国家思想の涵養」（同書、92 頁 参照）が加わったことにも象徴されている。

<sup>24</sup> 「修養」は「自己が其意志の力により、自己の一身を支配する」意の「身を修むる」（1911：全集 7、21 頁）と「有らゆる方法を用いて正道に従ひ養育する」意の「心を養ふ」（同書、22 頁）より成る。

<sup>25</sup> 新渡戸はこの文脈で修養が目指すものは功名富貴ではないと言明する（1911：全集 7、30 頁 参照）。

<sup>26</sup> 新渡戸は「人格無視（De-personalization）こそ、悲しいことに、これまで東洋の特性であった」（1930：全集 16、42 頁；和訳 全集 20、68 頁）と嘆く。



### 3. 2. 「修養」と学校教育および社会教育

1891年、母校札幌農学校で教育活動を始動させた新渡戸の信念は、「単なる情報の貯蔵器ではなく、人間形成の影響を持つ者」（1892：全集23、565頁；和訳 全集22、433頁）として生徒に向き合うことにあった。英文学は一文学上の知識を供給するものではなく―「若人の心に影響を及ぼす最上の方法」（1891：全集23、550頁；和訳 全集22、414頁）であり、歴史は一過去の事実をたどるものではなく―青少年に「人格の高潔さや個人の偉大さを知」（1893：全集23、575頁；和訳 全集22、445頁）らしめる方法であると考えた新渡戸は、「修養」の名のもとこれらの領域の西洋文献を読むことによって人格の向上を促すという―後に教養主義と呼ばれることになる―新しいスタイルの教育を実践する<sup>27</sup>。

東京帝国大学入学のための予備校として位置づけられていたエリート養成のための中等学校である第一高等学校へ1906年に校長として赴任した新渡戸は、一年生全員を対象として週一回の倫理講義を担当するとともに、有志<sup>28</sup>を対象としてカーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）の『衣服哲学（Sartor Resartus）』（1836）やゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1882）の『ファウスト（Faust）』（1808-1833）を講ずる課外講義、さらに週一回の自宅での面会日を設定し、ここに「高等学校の教養主義文化＝西洋の古典や小説の世界に没頭」（竹内 2003、188頁）というエリート学生を対象とする「修養」が確立される。教育の理想をイギリスのパブリックスクールに、教育者の理想を人格の感化力（personal influence）を備えたアーノルドにみる新渡戸は<sup>29</sup>、着任直後、vitality・mentality・moralityという知徳体の諸力に sociality という力を加え個性と社会性を兼ね備えるバランス感覚（sense of proportion）<sup>30</sup>の重要性を説くことで前任者である狩野亨吉（1865-1942）校長時代の第一高等学校の校風である籠城主義の改変を求めるとともに、「性格の修養に努られよ」（石井 1934、253頁）と「修養」の道に誘う。授業という枠を超えた交流を介して「生徒の人格向上、修養向上をはかるよう努力し、生徒に非常に深い感化を与え」（松隈 1969、207頁）た新渡戸のもと、第一高等学校は「修養」の空気でもたされていく。注目されるのは、新渡戸が「修養」の浸透を暗示的誘導的に達成しようとしていたということである（矢内原 1940、142頁 参照）<sup>31</sup>。1913年に第一高等学校を辞することになった新渡戸は、告別にあたってみずからの教育信念を忠君愛国・自由な発達・品格に収斂して提示したうえで、第一高等学校におけるみずからの教育活動を「人の根本をつくるべき性格の修養といふ事を常に言つて来たつもりである」（同書、152頁）と総括する。

新渡戸は、学校という教育機関を介さない教育、いわゆる市井の教育にも関心を示した。それは、「日本の民衆の精神的レベル」向上には学校教育と社会教育の双方に力を入れることが肝要であると意識されていたからである（同書、144頁 参照）。1909年に「車挽く人、柴刈る野の人」（1911：全集7、

<sup>27</sup> 教育者としての第一歩を踏み出すことになった札幌農学校で新渡戸は、本科では農政学、農業史、農学総論に加えて殖民論、経済学、ドイツ語を、予科では倫理、歴史学、英文学を担当し、加えて課外として原書講読グループと会話グループ、そして日曜日の聖書クラスを組織する。

<sup>28</sup> 有志には後に文部大臣となる前田多門（1884-1962）、田中耕太郎（1890-1974）、森戸辰男（1888-1984）、後に東京大学総長となる南原繁（1889-1974）、矢内原忠雄（1893-1961）らが含まれていた。

<sup>29</sup> 新渡戸は第一高等学校辞任に際して、就任に先立ってイギリスのイートン、ラグビー、ハロー等のパブリックスクールで校長学を修める希望をもっていたと述懐する（矢内原 1940、149頁 参照）。

<sup>30</sup> 新渡戸の言明からは、社会に目を閉ざさぬ開放性をもつ新しい第一高等学校の姿がすでに念頭にあったことがうかがわれる（石井 1934、251頁 参照）。

<sup>31</sup> 新渡戸の第一高等学校における姿勢は「暗示的な教育」と「人格的感化」に貫かれていた（矢内原 1940、139頁 参照）。ベルマン／ミュラーは、近年のエビデンスに依拠する教育学への指向性をイデオロギーや直観に依拠した教育学からの離反とみなすが（Bellmann/Müller 2011, S. 13）、イデオロギーや直観に依拠する教育の担い手として新渡戸をみるならば、新渡戸の教育者としての評価が新渡戸に直接の感化を受けた門下生の世代で立ち消えとなった背景をここに求めることも可能であろう。

8 頁) など勤労青少年を読者とする通俗雑誌『実業之日本』の編集顧問に就任した新渡戸は、第一高等学校校長職にある者が「通俗平易に流るる」(同上) 文章を公にすることに対する苦言もあるなか、毎月二回「込入つたことを省き、専ら平易を主とし、浅く平たく綴」(同上)<sup>32</sup> った人生論の執筆を断行する。『実業之日本』に掲載された訓話は、個々人が果たすべき義務を中心に説く『修養』(1911)、人と人との関係を中心に説く『世渡りの道』(1912) 等に単行本化されいずれも多く読者を獲得するが<sup>33</sup>、その訓話は「徳の貯蓄に至つては、職業の貴賤、金力の有無、社会階級の高下、身体の強弱に関係なく出来る。而も最初の種子は既に各自に有つて居るから今から・・・今晚からでも直に積み始めることが出来る」(同書、211 頁) という語調で平凡な日々の務めの心がけ—「道德性の涵養」—に向けられていることをここでは確認しておきたい。

### 3. 3. 「修養」と職業教育

「修養」の名のもとに語られる教育は全面発達を指向する一般教育であり、これはしばしば専門教育わけても職業教育に対置される。「全面発達の思想」(勝田 1973、223 頁) —ランジュヴァン (Paul Langevin, 1872-1946) の言によれば「生業の機械的行動や社会的拘束にたいして、人間味を失わないための手段」(同書、208 頁) —として、また「孤立化の克服の思想」(同書、216 頁) ないしは人道主義の思想—ランジュヴァンの言によれば「人間のさまざまな能力の間に均衡を実現」(同書、208 頁) する手段—として教養は普遍性志向を有するのであり<sup>34</sup>、「職業的訓練の特殊的な性質」(同書、215 頁) に対しては忌避反応を胚胎する。「修養」は近代化の過程で西洋文化への憧憬を吸収しながら教養としてエリート階層にしっかりと根をおろすが、教養主義の教育構想はその全面発達への指向性の帰結として教養と職業の乖離に傾くことが多い<sup>35</sup>。

新渡戸は「万事につき幾分かを知り、ある事については凡そを知る」(1932: 全集 16、329 頁; 和訳全集 20、435 頁) ことをもって「理想的教育」のあり方とみなす。「万事につき幾分かを知」とは「常識に対する健全な基礎をきづく〔ママ〕」「広い一般教養」であり、「ある事については凡そを知る」とは「特殊な専門知識」である<sup>36</sup>。新渡戸が「修養」という語で説いた一後に教養という後で定着する一教育構想もまた職業教育へのまなざしはきわめて淡泊であった。

とりわけ高等教育—それは新渡戸の教育活動の主たる現場であったが—において、職業教育は徹頭徹尾周辺の副次的な次元にとどまる。高等教育の目的を職業を得る手段とみなすことに新渡戸は強い違和感を表明する。新渡戸によれば高等教育の目的は英語では culture ドイツ語では Bildung すなわち「精

<sup>32</sup> 読者として新渡戸が念頭に置いていたのはまた「山深き寒村の少女、都会の最中に迷ふ男子等」(石井 1934、305 頁) であった。

<sup>33</sup> 実業之日本社長増田義一 (1869-1949) によると、『修養』は 140 版を超える売り上げを記録している (増田 1936、176 頁 参照)。庶民向け著作としては、実業之日本社からは他に『自警録』(1916)、『一日一言』(1915)、『東西相触れて』(1928)、『偉人群像』(1931)、『内観外望』(1933) が、そして実業之日本社以外の出版社からは『人生雑感』(1914)、『婦人に勧めて』(1917)、『一人の女』(1919) が刊行されている。

<sup>34</sup> 教養を試みに「子どもたちの祖先がつくり出した文化の基本的な構造を自己に同化することを通して、それを支配する能力」(勝田 1973、199 頁) と定義した勝田守一は、教養に「偽善と非現実」という側面が付随していることを示唆している (同書、198 頁 参照)。

<sup>35</sup> その一方で、1920 年代、日本では職業教育と乖離した普通教育を提供する学校教育への批判を通奏低音として「職業に関する知識と、職業に対する心構えを積極的に教育」(江口 2014、2 頁) する職業指導運動が広まりをみせており、学校と社会を架橋する職業指導運動はまた新教育運動に位置づけられる労作教育からも影響を受けていた (同書、2-3 頁 参照)。

<sup>36</sup> これは戦後日本が高等教育の枠組みとして参照したハーバード大学の構想に重なるものであり、近年の中央教育審議会が提出した『学士課程教育の構築に向けて (答申)』(2008 年 12 月 24 日) で大学の公共的使命として掲げられた「21 世紀型市民」の育成においても維持されているものである。「21 世紀型市民」とは、「専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材」(中央教育審議会 2008、3 頁) であり、この内容が「学士力」と称される。



神修養」(1933:全集6、430頁)から導き出されるものであり、その本質は「人間としても根柢を造る、土台を拵へるといふことに、重きを」(同上)置いたもので、職業を目的とせず「どんな職業についても流通が出来、どの職業にも役に立つやうな融通のきく人を造る。肚を拵へる。思想を練る」(同上)ことにある。他国における高等教育の目的をアメリカにおける仕事の効率重視型、イギリスにおける人物重視型、ドイツにおける真理の発見重視型という三類型に分類した新渡戸は、人格軽視の傾向を示す一とみなされる一ドイツの高等教育に対比させ、人格重視を本旨とするイギリスの高等教育を高く評価する(同書、425頁 参照)<sup>37</sup>。翻って、日本の高等教育の目的は一みずからの出身校である札幌農学校もまた「新開地に必要な人物」(同書、408頁)を養成することを目的としていたように一伝統的に役人の養成に置かれており(同書、406頁 参照)、きわめて職業的であると言わざるをえない。学問は「心の解放」「自由な精神」(同書、409頁)に資するべきであるという立場から、新渡戸は高等教育を特定の職業を想定することなく「いかなる職業にも役に立つやうな、根本的な修養を授けるもの」(同書、445頁)と規定し、役人の養成を目的とする当時の日本における高等教育の風潮に抗し、高等教育の目的を個々人が自身で決定することを推奨する(同書、426頁 参照)。高等教育における職業教育とは最終的に、「それぞれ職業に必要な学理のプリンシプル、一般的基礎的知識を得るといふことで、職業教育そのものは、間接的に受ける結果」(同書、445頁)に過ぎない。最終的に「サムシング・オブ・エブリシング、エブリシング・オブ・サムシングといふことをもつて理想とする」(同書、434頁)高等教育の存在理由は、「自分より偉い人格に接するところ」(同書、438頁)にこそ見出されるべきなのである。

一方、庶民教育という観点からは新渡戸は一貫して職業教育にきわめて大きな意義を付与している<sup>38</sup>。高等教育とは無縁の庶民に向けられた「修養」を語るなかで、新渡戸は職業決定の心得をたとえば「光明」面に心を奪われた拙速な決定ではなく「暗黒面」に目を向ける冷静な決定を心がけよといった実際の助言として具体的に提示したうえで(1911:全集7、52頁 参照)<sup>39</sup>、基本的には国家に役立つ職業に決定することを唱道する。「修養」における職業の位置づけに関わって、新渡戸は「僕は詩を作るより田を作れ主義である。今日の日本は殖産興業の発達を講ずるのが、最も大切で、之がため国民は其全力を傾ける必要がある。僕が農工と云ふ様な実学の普及を希望するのも、亦此趣意に外ならぬのである」(同書、70-71頁)と言い切る。この言明にかんがみると、新渡戸の意図は「一流ならば、学者でも政治家でもよし、二流なら寧ろ実業家となれ、三流なら猶更ら」(同書、72頁)<sup>40</sup>という職業決定の姿勢を庶民に意識化させることにあったといえる。

<sup>37</sup> 第一の類型はエフィシエンシー重視のアメリカに代表される。アメリカは伝統的に「良き公民の指導者」(1933:全集6、409頁)ないし「精神のリベラルな人」(同書、411頁)の養成という「リベラル・エデュケーション」(同書、410頁)を重んじていたにもかかわらず、近年は「腕の利く、エフィシエンシーに有能な、能率のあがる人」(同書、411頁)の養成という専門学ないし「職業的な教育」(同書、410頁)重視に転換し、リベラルよりプロフェッショナルに傾いていること、「高等なるコンセンスを養ふといふより劣等なるせんもんセンス」(同上)を養成していることを新渡戸は嘆く。第二の類型は人格重視のイギリスに代表される。イギリスの大学は、新渡戸によると「人物本位」で「職業よりも人間を先づ造る」(同書、415頁)とされ、高く評価される。第三の類型は真理重視のドイツに代表される。ドイツの大学の目的は「客観的の真理を究明しようとする」ところにあり、「人間そのものといふことでなく、形而下の学問をし」(同書、423頁)「自分自身を造り上げることはどうでもよい」(同書、425頁)という姿勢がみられるとし、新渡戸はこれを歓迎していない。

<sup>38</sup> 新渡戸が同時に女子教育についても職業教育に大きな意義を付与していたことは注目される。新渡戸は「女子独立論」と題して「女子に職業的教育を施すべし、如何なる場合にも困らぬやう、独立するだけの教育を施さなければならぬ」(石井 1934、467頁)と説いていた。

<sup>39</sup> 新渡戸がここで意図するのは、軍人・政治家・実業家に憧れる人々を戒め「名利の夢を離れて冷静に、私心を離れて公正に考へ」(1911:全集7、57頁)ることの勧めである。

<sup>40</sup> 庶民と同じ目の高さでの語りを目指す新渡戸は、自らの子育てを引き合いに出し、具体的には自分の息子が「殊更好むところがなければ、願はくは技術を修め、以て国の殖産興業に資したい。文学は余暇に慰にするなら差問題ないが、専門にするのは可くない」(1911:全集7、72頁)と記す。

新渡戸の「修養」における「高等教育と職業教育の関係」と「庶民教育と職業教育の関係」の対比から浮かび上がってくるのは、勤務校では「修養」の名のもと vitality・mentality・morality・sociality を織り込む「人格の向上」によって国家の指導者の養成を目指す一方で、通俗雑誌を介して同じ「修養」の名のもとに日々の務めに堅実に取り組む「道徳性の涵養」を促すことによって国家を支える労働者の養成を目指す教育者新渡戸の姿である。

## 4. 「修養」と階層

### 4. 1. 階層を解消する「修養」

新渡戸の「修養」は、「人格の向上」という文脈では形而上的内省的な傾向をもつ理想主義教育という装いで立ち現れ、「道徳性の涵養」という文脈では実践という身体性を前景化させたハビトゥスの教育として現出する。新渡戸は—その植民政策を含めて—「特殊な国家や階級を超越した普遍的人類的な立場から『正義』を主張し、これを実現しようとする」（古田 1979、226 頁）態度の実務家ないし「人格主義的な理想主義の発現形態」（同上）と定義される人道主義の実践者と目されているが、階層の架橋という観点から新渡戸の教育論を検証する研究者における新渡戸評価は、人道主義の精神の反映として階層を架橋するものとして新渡戸の教育論を賞賛する立場と、少数リーダーの形成と多数労働者の形成という階層の二極化を固定するものとして新渡戸の教育論を批判する立場に二分されている。

新渡戸の「修養」が階層を架橋する構想であるとする立場を代表する武田清子は、まず階層の架橋を指向する新渡戸の「修養」と階層の断絶を引き起こす教養の差異に着眼する。新渡戸が「修養」の名のもとに第一高等学校にもたらした教養主義とケーベル門下生に代表される教養主義を同一の系統に帰する解釈が支配的であるなか、武田は「人格主義と教養主義とソシヤリティ」でもって「日本の教育の本質を変革する重要な働き」をもった新渡戸の門下生とケーベルの門下生は根本的に異なる教育構想に置かれていたと断じる。新渡戸は第一高等学校の生徒を繰り返し「to be か to do か」という問いで内面的な人格完成と外面的な社会的活動についての思索に導くが、そこでは to be の追求が「to do を切り捨てたものではな」くむしろ「実践の真の目的と意義を究明することが to be の意味を追及する課題」（武田 1960、68 頁）として認識されていたと武田は捉える。したがって、「知的文化的関心」に導かれその人格主義が「観念的な内面省察」に終始することがケーベル門下生の特性とするならば、新渡戸門下生の特性は一武田によると「キリスト教信仰に基づく」ことがこの決定的な差異を生み出すのであるが—「実践的関心」に導かれその人格主義は「歴史形成力としての実践へと主体をつき動かしてゆくような dynamic なタイプ」（同書、70 頁）へと昇華することにより<sup>41</sup>、両者は異なる系統の教育構想に属するとみなされるべきなのである<sup>42</sup>。武田はさらに新渡戸における庶民階層向けの「修養」の存在に着眼する。武田は高等教育への扉を閉ざされた—したがって教養主義の圏外に置かれた—庶民に通俗雑誌を通じて訓話を提供する新渡戸にあって、「その教育対象は階層によって断絶されることなく、全国

<sup>41</sup> 武田はケーベル門下生と新渡戸門下生の教養主義の相違をキリスト教的感化の有無に還元する。武田によれば、新渡戸門下生は「人間をこえたもの（神）との vertical な関係を基礎にして、他者との horizontal な、社会的関係に立ち、人格としての自己実現と sociality（社会性）あるいは、to be プラス bo do としての実践的教養主義を基礎として、学問、（知性）、職業、社会、国家との間の新しい価値の構造が組み立て直された」（武田 1960、107 頁）ことによって、社会的無関心から免れていた。

<sup>42</sup> その証左として武田は多くの新渡戸門下生が戦後日本における教育の民主化に関わっていることに言及する。戦後の民主主義的な教育基本法の成立関わった新渡戸の弟子としては、当時の文部大臣田中耕太郎、文部次官山崎匡輔（1888-1963）、教育刷新委員会の委員森戸辰男、河井道、天野貞祐（1884-1980）、高木八尺（1889-1984）、南原繁、安倍能成（1883-1966）、和辻哲郎、前田多門、長与善郎（1888-1961）といった名があげられる。

民的ひろがりを持っていた」(同書、107 頁)と結論づける。

「修養」と教養の同質性という観点から新渡戸の教育論における階層の架橋の可能性を指摘するのは筒井清忠である。日本において「エリート文化の中核となる教養主義と大衆文化の中核となる修養主義とが、明治後期に『修養主義』として同時に同一人物として成立」(筒井 1995、33 頁)していたという事実に注目する筒井は、その同質性ゆえに修養主義と教養主義が分離して以降もその境界はきわめて流動的であったとみる。近代日本における階層のもつ特徴として『『努力』『習得』による『人格の完成』』(同書、34 頁)というエートスを大衆と共有するエリートは、権威の顕示を放棄することと引き換えに「大衆の内面的支持に支えられ易」(同上)<sup>43</sup> という側面を有した。筒井の見解では、同じ事柄を異なった語りで提供する能力をもつ新渡戸は「『修養』の名の下に教養主義(一高生)と修養主義(山深き寒村の少女)を同居させ」(同書、32 頁)つつ日本に独特なこの階層的境界の溶解の度合いをさらに引き上げることに成功していた人物である。したがって筒井もまた新渡戸の「修養」が階層の架橋に寄与したという立場を支持しているといえる。

#### 4. 2. 階層を固定する「修養」

武田が階層融合の契機とみた新渡戸門下生における to be と to do をめぐる問いとの対峙を、渡辺かよ子は階層分断の契機とみる立場をとる。新渡戸は「修養」の今後の展開として「修身は人を縮めるばかりである」(1911: 全集 7、31 頁)とする反動、「修身と養神を分解」して前者を捨象する知行の分離(同書、32 頁)、そしてさらにその傾向の進んだものとして「宗教心の發揮」(同書、31 頁)という三形態を掲げているが、渡辺の解釈では第一高等学校の多くの生徒が没頭した to be と to do をめぐる問いとの対峙は暗黙のうちに行動に対する知性の優位を認めており、第二の形態の典型として理解されるものである。行動に対する知性の優位を認めるエリート階層向けのこの「修養」の構図は、「知識や理論とは隔絶した道徳性および訓練としての一定行為の繰り返しを強調」(渡辺 1997、36 頁)する庶民階層向けの「修養」の構図とは鮮やかな対照をなしており、それゆえに渡辺の目には新渡戸の「修養」は階層を分断する作用を伴うものと映る。

「高尚なことを説かないで、卑近な何人にも解り易く、又何人も知らなければならぬことを説て居る」(1909: 全集 7、685 頁)という『実業之日本』における新渡戸の態度表明に依拠することで、綱澤満昭もまた新渡戸の「修養」を階層分断の働きかけとして解釈する。新渡戸は庶民向けの「修養」において「如何に逆境に陥つても、其中に幸福を感じ、感謝の念を以て世を渡らうとする。それが、僕の茲に説かんとする修養法の目的である」(1911: 全集 7、30 頁)と説くが、これは綱澤によれば「国家批判、社会批判の眼はどこにもなく、階級対立を隠蔽し、社会的矛盾を個人の忍耐と努力という心情の世界で解消せんとする新渡戸独特の説教」(綱澤 2007、6 頁)にほかならず、与えられた場でささやかな実践を努力により習慣化することを庶民に求めるこの語りは既存の階層を固定する教育論の域を超え出るものではない<sup>44</sup>。新渡戸の教育論は「国家の将来を玄関口でリードしてゆく新進官僚の育成」(同書、7

<sup>43</sup> この連関で、筒井はひとつの具体的事例を提示する。第一高等学校に学び、新渡戸の助言を受けて 1914 年に住友に入社し新渡戸の助言を仰ぎながら住友の人事管理を人格尊重に置き、修養主義を経営家族主義として結実させた三村起一は、教養主義的経営者として「日本の教養主義の流布形態が文化至上主義的なものでなく政治・経済的価値との妥協的な形態をとっていたので自己を教養主義の立場の人間と考えることができた。しかし、企業経営者としての活動と教養主義の『文化享受』理念とは本来的に合致しにくいものなので、『文化享受』理念の方はアクセサリー的・文飾的方向へと後退し、実際のエートスとなっていたのは『人格』理念の方であった。そして、それは伝統的な修養主義との連続性が極めて強いものなのであった」(筒井 1995、148-149 頁)。そしてこの「産業精神」に適合するエートスである「修養主義的教養主義」はまさにイギリスの culture と好対照をなしている。



頁)と「勤労、忍耐、忠誠といった徳目をにになってくれる地方の若者たち」(同上)の育成を厳密に区別して認識し、それぞれが国家へのそれぞれの任務を果たすべくそれぞれの「修養」に取り組むことを求めるものであった。綱澤は新渡戸が庶民に向けて説いた「修養」を、現在の平凡な仕事を真面目にすることでたとえ立身出世しなくても人格をみがいたという満足感を約束する物語とみなした竹内洋の解釈を引きながら、「被支配者としての人間養成」という国家の使命に供するものであり、その本質が「多くの若者がある地位にしばらくつけ、功名とか富貴とか、栄華といった野心、野望を粉碎しながら、しかも猜疑心、煩悶、逃避を許さぬといったもので、それぞれの領域で被支配者として勤労にいそしみ、身体を鍛え、人格をみがき、『立派』な人間になることの奨励という『知足』の思想」(同書、10 頁)にあったと総括する。綱澤は何よりも新渡戸の「修養」に「真の修養」にあってしかるべき「あらゆる権力から自立」という視点が決定的に欠如していることを問題視する(同上 参照)。

国家批判・社会批判の欠如、その帰結としての階層の温存という支配者理論という観点から新渡戸の「修養」を考察した研究者としてはさらに鶴見俊輔<sup>45</sup>があげられる。新渡戸の高等教育論は「いること」(to be)を「すること」(to do)に優越させてはいるが、「いること」のためには「すること」が必要とされ、日常における努力を重視することで(鶴見 1960、189 頁 参照)「学問のための学者をつくることではなく、事業のための学者(学問をつかいこなす事業人)をつくること」(同書、192 頁)を目指すものであったことを評価しつつも、鶴見は新渡戸の高等教育論が同時に「支配階級の美化」(同書、207 頁)すなわち「日本の支配階級の道德観がそのまま被支配階級におこなわれることをよしとする前提」(同上)に貫かれるものであったことを糾弾する。

#### 4. 3. 包摂／排除からみた「修養」の位相

新渡戸が「修養」という語で語った教育論については、これを階層を架橋する構想とみる解釈と階級を分断する構想とみる解釈が新渡戸研究者のあいだで相半ばしていることを確認したうえで、ここでは新渡戸の「修養」の位相をルーマンの包摂／排除の理論<sup>46</sup>を手がかりとして考察したい。ルーマンによると、包摂とは「人が社会的に顧慮されるチャンスとして指し示され」(Luhmann 1997, S. 620; 和訳 915-916 頁)ている状態であり、包摂の付随現象として立ち現れる排除は翻ってこれが「指し示されないままに留ま」(同上; 和訳 916 頁)っている状態である<sup>47</sup>。包摂領域と排除領域の対比で注目されるのは、包摂領域については一つの機能システムに包摂されていることが他の機能システムに包摂されることを自明としないのに対し、排除領域については「諸機能システムが多重的に依存しあっている」(同書, S. 631; 和訳 927 頁)ことを背景として一つの機能システムからの排除が他の機能システムからの排除を自動的に引き起こすという傾向がみられることであり、この排除の相互強化という観点か

<sup>44</sup> 「一寸見ると何でもない、只少し行りにくい所がある位のことを、毎日繰返し繰返し行ふがよい」(1911: 全集 7、94 頁)と勧め、具体的な例として「飲食のこと、冷水を浴びる、毎日日記をつける、散歩をする、一定の時間には必ず起床する、食事の前には民の恩の渥きを思ふ、毎日何回とか日を定めて神社に参詣する、両親其他の命日には花を捧げる」(同上)といったことを提案するとともに、みずから 20 年以上実行している冷水浴の例を紹介する。

<sup>45</sup> 鶴見は新渡戸の思想を「各個人の人格を軸とし〔中略〕人格を準備するすじみちをつくる方法を説く」(鶴見 1960、187 頁)修養論と「現実の日本国家の制度を軸とし〔中略〕国民大衆の信用をつなぐにたるような政策として実行にうつす方法を説く」(同上)国体論を縫い合わせた折衷主義として考察する。新渡戸の折衷主義は「官僚・技術用の思想として準備されており、状況に順応することをとおして状況の要求に応じてゆくかまえ」(同書、212 頁)であり、その当然の帰結として「日本の国家のうごきにたいする批判の機能」(同書、213 頁)は果たさない。

<sup>46</sup> ルーマン思想における包摂／排除の概念は変化している。小松丈晃によれば、1970 年代および 1980 年代には包摂の残余概念にすぎなかった排除が、1990 年代には包摂と対となる概念として浮上する(小松 2003、182-192 頁 参照)。

<sup>47</sup> 包摂／排除の差異は構造論のレベルでは「コミュニケーションを担う諸人格(Personen als mitwirkungsrelevant)として位置づけるか、位置づけないか」(Luhmann 1995, S. 244; 和訳 235 頁)、そして意味論のレベルでは「自己参照(Selbstreferenz)と外部参照(Fremdreferenz)」(同上; 和訳 236 頁)―自己が社会への参加の条件ないしチャンスとして組み込まれているか否か―としても示されうる。

らルーマンは「排除は包摂よりもはるかに強い結合をもたらす」(同上; 和訳 928 頁)と結論づける<sup>48</sup>。包摂領域と排除領域の対比でいまひとつ注目されるのは、包摂領域で人間が「人(Personen)」として承認されるのに対し、排除領域では人間は「身体(Körper)」とみなされるという傾向である(Luhmann 1995, S. 245; 和訳 237 頁 & Luhmann 1997, S. 632; 和訳 929 頁 参照)。

「修養」という語で紡ぎだされた新渡戸の教育理念は、文化的分断(西洋と東洋)の架橋を土台として、階層的分断(エリートと庶民)をも架橋しようとするものであった。階層の架橋として新渡戸が具体的に提案するのは、「武士道」の修正版としての「平民道」である。『Bushido. The Soul of Japan』(1900)において、江戸時代における武士の倫理道德の規範である「武士道」を提示した新渡戸は、1904年には「武士道」を過去のものとしこれを平民化した一戦時の武士でなく「平」和時における「民」すなわち平民に向けられた一新たな全階級の倫理道德として「平民道」を唱え、時代に適った国民道德として描き出す(1907a: 全集5、24-25 頁 参照)<sup>49</sup>。そもそも日本の「修養」と教養は「努力による人格の向上」という共通項を有していたこと、新渡戸が階層に適応した語りを得意としたことで、この架橋はきわめて実現性の高いものともみられながら、実際には「修養」は「人格の向上」と「道德性の涵養」という含意を階層ごとに異なった配分で溶かし込まれることで階層の相互排除—階層の固定—に供することになった。

新渡戸は「修養」の今後の展開のひとつとして「思想家は修身と養神を分解して、養神法を取つて修身法を捨つるを以て、却て高尚なるが如く信ずるやうにな」(1911: 全集7、31-32 頁)る可能性—これは武田の解釈によるとケーベル門下生の教養主義が有する傾向であり新渡戸門下生はこの傾向を免れているとされる—を提示しているが、この予測は新渡戸自身が「修養」のもつ階層分離の蓋然性に自覚的であったことを示唆している。新渡戸は階層を架橋する人道主義を唱えながらも、庶民階層に向けられた「修養」としては日常の実践を介した身体上の習慣化としての「道德性の涵養」、エリート階層に向けられた「修養」としては文学や思想の読書を介した内面上の「人格の向上」を濃縮して処方することにより結果的に階層分断を招致している。鶴見によれば、新渡戸の「修養」は「からだをかいならしてきたえていく」(鶴見 1960、188 頁)修身という側面と「精神を個人の人格の中にめざめさせてたもってゆく」(同上)養神という側面の合成であり、これは、ルーマンの包摂・排除の構図に当てはめれば、庶民が「からだをかいならしてきたえていく」排除領域に知足をもってとどめおかれる一方で、エリート学生は「精神を個人の人格の中にめざめさせてたもってゆく」ことを自覚化し包摂領域に被包感をもって揺蕩っていたという見方ができる。前者は、身体性を核として日々の平凡な務めを尽くすという庶民向け「修養」の基底をなし、後者は人格を核として内省へと導くエリート向け「修養」の基底をなしており、新渡戸の教育論は「修養」という単一の語で説かれながら階層の差異を解消することなく固定する方向で作用する構造を有していたといえる。

## 5. おわりに —理想主義者新渡戸の地平—

階層解消を指向する新渡戸門下生の旧制高校教養主義と階層固定を指向するケーベル・夏目門下生の大正教養主義を決定的に区別する前提として宗教の存在に注目したのは武田清子であった。現代社会に

<sup>48</sup> 現代社会を包摂／排除によって読み解くなかで、「包摂／排除という変数が地球上の相当の地域において、メタ差異の役割を引き受け、諸機能システムのコードを媒介しようとし始めている」(Luhmann 1997, S. 632; 和訳 928 頁)事態にルーマンは危惧の念を示している。

<sup>49</sup> 1904年に雑誌『キリスト教世界』に「平民道」というタイトルで短く紹介された新たな国民倫理は、1919年には『実業之日本』に同じタイトルでより詳細に紹介されている(1919: 全集4、538-544 頁 参照)。

おける包摂／排除の功罪を考察したルーマンもまた排除を解消ないし緩和する作用を繰り返し宗教に求めている<sup>50</sup>。「諸機能システムが多重的に依存しあっている」(Luhmann 1997, S. 631; 和訳 927 頁) 社会においては、一つの機能システムからの排除が他の機能システムからの排除を連鎖的にもたらすが、政治システムや教育システムや経済システムや法システムに妥当するこの法則が宗教システムには当てはまらない(Luhmann 1995, S. 242; 和訳 232-233 頁 参照) ことに注目するルーマンは、世俗化する社会にあってこそ顕在化する一機能システムとしての教会ではなく遂行システムとしてのディアコニー(Diakonie)<sup>51</sup> としての一宗教の新たな可能性に期待を寄せる。

新渡戸は人道主義に立ち、自らが専門とする植民政策においても植民者と被植民者が相互に敬意をもって接することの大切さを主張したが、その一方で両者の立ち位置の差異を無化することは想定の外に置かれていた(Ito 2014 参照)。新渡戸はまた国際性を重んじるが、その一方で国家性に根差す差異を無化することは望んでいない。教育の理想を語る中で差異化の緩和が表出するのは、唯一、「修養」の未来像として描かれた宗教への昇華という文脈においてである。差異化の緩和一包摂一に供する宗教とは、新渡戸によれば教会によって担われた宗教ではなく一それは彼が属したクエーカー(友の会)の本質をなす特徴であるが一制度からは徹底的に解放された宗教であり、そこには新渡戸の「修養」の未来像とルーマンの包摂／排除の未来像との鮮やかな共振がみられる。

新渡戸は「修養より宗教へ」と題し、「修養」を「云はば円満なる常識の如きもの」(1915: 全集 10、92 頁) と言い換えたうえで、学生たちを「修養卒業者の入り来る可き精神界」(同上) である宗教への道へと誘う<sup>52</sup>。また、庶民に対しては「人間以上のもの」に目を向けることの大切さを説き、「縦の関係」という表現で宗教へと誘う。「僕は何の宗教といふことを、爰で彼れ是れいふことを好まぬ。只人間以上のものがある。そのあるものと関係を結ぶことを考へれば、それで可いのである。此縦の関係を結び得た人にして、始めて根本的に自己の方針を定めることが出来る」(1911: 全集 7、58 頁)。新渡戸が信仰するクエーカーは、機能システムとしての教会ではなく、「内なる光」<sup>53</sup> に根ざす一遂行システムとしての一実践を重視する宗派である。人格のさらなる向上のために新渡戸が宗教への関心を示す学生を託した畏友内村鑑三(1861-1980)<sup>54</sup> の唱える無教会主義もまた機能システムとしての教会を否定し行動すること一すなわち遂行システム一を唱導する宗派であった。

武田は新渡戸の「修養」を考察するなかで、その独自性に言及して「to be を追及することが結果的

<sup>50</sup> たとえば、ルーマンは『社会の社会』において「排除された者との連帯は人為的なたちでのみ、つまり宗教的義務や魂の救済のチャンスを通じてのみ達成されえた」(Luhmann 1997, S. 623; 和訳 918 頁) と述べる。世俗化された時代における宗教に対しては、具体的な宗教を信仰するという私的事象としての対象としてではなく、諸宗教の相互理解のもとに公共性を構築するという公的事象として把握することで、ハーバーマス(Jürgen Habermas)をその筆頭として包摂の拠り所としての期待が寄せられている。しかし、近年宗教学者である磯前順一は、私であることをやめ公に転じた宗教が公的宗教として公的領域の包摂に供するばかりではなく、公的領域が権力に掌握された場合には社会的権利を剥奪する排除に加担する危険性をあわせてもつことを指摘している(磯前 2013 参照)。

<sup>51</sup> 分化されたシステムに見られる三種のシステム関係として包括的システムとしての社会に対する関係である「機能(Funktion)」、他の社会システムに対する関係である「遂行(Leistung)」、自己自身への関係である「再帰(Reflexion)」をかかげるルーマンは(Luhmann 1977, S. 56; 和訳 45 頁 参照)、宗教システムにおいては教会(Kirche)が機能を、ディアコニー(Diakonie)が遂行を、そして神学(Theologie)が再帰を担うとし(Luhmann 1977, S. 56-59; 和訳 46-48 頁 参照)、世俗化は宗教システム内の教会・ディアコニー・神学の分化を強めるとみる(同書, S. 268; 和訳 199 頁 参照)。

<sup>52</sup> 新渡戸はこの必然性を説き、「修養を以ても満足しない者は、人間の深き高き欲望を達するがために、最後の解決を宗教に求める事になる」(1915: 全集 10、92 頁) と述べる。

<sup>53</sup> 新渡戸はみずからクエーカー教徒になった理由として、クエーカー主義のもつ神秘主義によって一神秘主義は西洋よりもむしろ東洋に深く根付くものであるの一はじめてキリスト教と日本を架橋する可能性を見出したことに言及している(1936: 全集 15、335 頁; 和訳 全集 19、412 頁 参照)。

<sup>54</sup> 新渡戸が「受容的、抱擁的」な態度(武田 1961、283 頁 参照)であったのに対し、内村は「きびしく」「対決的」な態度(同上 参照)であった。両者の薫風を受けた者としては矢内原忠雄、高木八尺、前田多門らがいる。



には現実に対して妥協的となった観念論的教養主義と明らかに異質であらしめたものは、to do を必然的課題とするところの彼のピューリタンの実践的信仰（思想）」（武田 1960、107 頁）であると述べ、キリスト教を土台とする新渡戸の「修養」に帰される現実との対決姿勢を階層架橋の可能性と結びつけて理解する。しかし、新渡戸の「修養」においては宗教以上の普遍的な価値を有するものとして国家が想定されていたことを忘れてはならない。鶴見俊輔は新渡戸の「修養」がキリスト教に基づくものであったことを認めながらも、新渡戸の「修養」がその先に国家主義を措定しており、したがって新渡戸の「修養」は階層に架橋することにつながらなかったと断じる（鶴見 1960、188 頁 参照）。新渡戸の多くの弟子は官僚として時代の舵をとるが、これは一鶴見の解釈では一新渡戸の思想が「国家体制の奉仕者のみ」を生み出す「日本の官僚の思想のもっともすぐれた範型の一つ」（鶴見 1960、186 頁）として機能したことの証左であり、「青年時代に新渡戸思想で訓練されたものは、年齢と地位の上昇に応じて普遍宗教から現存政府の立場へとアクセントをおきかえて、何の違和感もなしに壮年時代以降には日本国家の体制の中心の位置にすむことができ」（鶴見 1960、188 頁）たということであり、その先には「新渡戸ゆずりのおだやかな趣味をそのままひきつぎながら、穏健な超国家主義、軍国主義、全体主義」（同書、211 頁）への道が開けていたとする<sup>55</sup>。庶民階層ではすでに新渡戸が姿を消した時代に新渡戸は忘却の対象となり、エリート階層では新渡戸の直系の弟子が退場する時代に新渡戸は忘れられる。「忘れられた偉人」という歴史的事実は、架橋の破綻と無関係ではないと思われる。

\* 本稿は平成 26 年度科研基盤研究（C）課題番号 26381024 の研究成果の一部である。

## 【参考文献】

- Bellmann, Johannes / Müller, Thomas (2011): Evidenzbasierte Pädagogik. Ein Déjà-vu? In: Bellmann, Johannes / Müller, Thomas (Hrsg.): Wissen, was wirkt. Kritik evidenzbasierter Pädagogik. Wiesbaden: VS, 9–32
- 中央教育審議会 (2008): 学士課程教育の構築に向けて (答申) [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) (最終アクセス 2014 年 10 月 31 日)
- 江口潔 (2014): 学校批判としての職業教育を読み直す。職業教育と普通教育の境界を越えて。近代教育フォーラム 23 1–14 頁
- 古田光 (1979): 文化主義・教養主義・人文主義。〔古田光・子安宣邦編著 日本思想史読本 東洋経済新報社 所収 216–228 頁〕
- Furuya, Jun (1985): Nitobe Inazo in Baltimore. A Graduate Student and Quaker. In: The Journal of International Studies 15, 43–71
- 堀松武一 (1987): 大正自由主義教育の研究。理想社
- 磯前順一 (2013): 公共宗教論の陥穽。『宗教概念あるいは宗教学の死』の後で。現代思想 41(1) 224–227 頁
- Ito, Toshiko (2006): Reformpädagogik aus dem Osten? In: Paedagogica Historica 42 (1-2), 93–107
- Ito, Toshiko (2014): Inazo Nitobe (1862-1933) und die Widersprüche der japanischen Modernisierung: Ein Leben zwischen dem Fremden und dem Eigenen. In: Dörpinghaus, Andreas / Mietzner, Ulrike / Platzer, Barbara (Hrsg.): Bildung an ihren Grenzen. Zwischen Theorie und Empirie. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt, 81–94
- 石井満 (1934): 新渡戸稲造傳。関谷書店
- 勝田守一 (1973): 人間の科学としての教育学。(勝田守一著作集 第 6 卷) 国土社

<sup>55</sup> 新渡戸の「修養」はしたがって、「国定修身教科書と普遍宗教」（鶴見 1960、188 頁）をつなぐ構想として理解可能なものであるとされる。

- 小松丈晃（2003）：リスク論のルーマン．勁草書房
- 小松丈晃（2013）：社会排除のリスクに抗する機能システムはありうるのか．ルーマンの「宗教」論ならびに福祉領域でのルーマン理論受容の動向．（高橋徹・小松丈晃・春日淳一：滲透するルーマン理論．機能分化論からの展望．文眞堂 所収 129－154 頁）
- 草原克豪（2012）：新渡戸稲造 1862－1933．我、太平洋の橋とならん．藤原書店
- Luhmann, Niklas (1977): Funktion der Religion. Suhrkamp (土方昭・三瓶憲彦訳『宗教社会学．宗教の機能』新泉社 1989)
- Luhmann, Niklas (1995): Soziologische Aufklärung 6. VS Verlag (村上淳一訳『ポストヒューマンの人間論〔後期ルーマン論集〕』 東京大学出版会 2007)
- Luhmann, Niklas (1997): Die Gesellschaft der Gesellschaft. Suhrkamp (馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会 2』法政大学出版局 2009)
- Luhmann, Niklas (2000): Die Religion der Gesellschaft. Suhrkamp
- 増田義一（1936）：新渡戸博士の思ひ出．〔博士追憶集 所収 175－184 頁〕
- 松隈俊子（1969）：新渡戸稲造．みすず書房
- 三木清（1942/1974）読書と人生．新潮社
- 成田龍一・大澤真幸（2013）：現代思想 40 年の軌跡と展望．現代思想 41(1) 28－48 頁
- 新渡戸稲造（1885）：Letter to Kingo Miyabe on 13. November.〔新渡戸稲造全集 第 23 巻 教文館 1987 所収 422－425 頁〕〔和訳 新渡戸稲造全集 第 22 巻 教文館 1986 所収 254－259 頁〕
- 新渡戸稲造（1891）：Letter to Joseph Elkinton on 23. April〔新渡戸稲造全集 第 23 巻 教文館 1897 所収 548－552 頁〕〔和訳 新渡戸稲造全集 第 22 巻 教文館 1986 所収 412－417 頁〕
- 新渡戸稲造（1892）：Letter to Joseph Elkinton on 21. April〔新渡戸稲造全集 第 23 巻 教文館 1897 所収 560－571 頁〕〔和訳 新渡戸稲造全集 第 22 巻 教文館 1986 所収 427－440 頁〕
- 新渡戸稲造（1893）：Letter to Joseph Elkinton on 19. February〔新渡戸稲造全集 第 23 巻 教文館 1897 所収 574－576 頁〕〔和訳 新渡戸稲造全集 第 22 巻 教文館 1986 所収 443－446 頁〕
- 新渡戸稲造（1907）：帰雁の蘆〔新渡戸稲造全集 第 6 巻 教文館 1969 所収 5－178 頁〕
- 新渡戸稲造（1907 a）：随想録〔新渡戸稲造全集 第 5 巻 教文館 1970 所収 5－236 頁〕
- 新渡戸稲造（1909）：余は何故実業之日本社の編集顧問となりたるか〔新渡戸稲造全集 第 7 巻 教文館 1970 所収 681－690 頁〕
- 新渡戸稲造（1911）：修養〔新渡戸稲造全集 第 7 巻 教文館 1970 所収 5－404 頁〕
- 新渡戸稲造（1912）：The Japanese Nation. Its Land, Its People, and Its Life〔新渡戸稲造全集 第 13 巻 教文館 1970 所収 3－302 頁〕
- 新渡戸稲造（1915）：人生雑感〔新渡戸稲造全集 第 10 巻 教文館 1969 所収 5－196 頁〕
- 新渡戸稲造（1919）：平民道〔新渡戸稲造全集 第 4 巻 教文館 1969 所収 538－544 頁〕
- 新渡戸稲造（1927）：Japanese Traits and Foreign Influences〔新渡戸稲造全集 第 14 巻 教文館 1970 所収 427－633 頁〕〔和訳 新渡戸稲造全集 第 18 巻 教文館 1985 395－624 頁〕
- 新渡戸稲造（1930）：The Sense of Personality〔新渡戸稲造全集 第 16 巻 教文館 1969 所収 42－43 頁〕〔和訳 新渡戸稲造全集 第 20 巻 教文館 1985 所収 68 頁〕
- 新渡戸稲造（1932）：An ideal education〔新渡戸稲造全集 第 16 巻 教文館 1969 所収 329－330 頁〕〔和訳 新渡戸稲造全集 第 20 巻 教文館 1985 所収 435－436 頁〕
- 新渡戸稲造（1933）：内観外望〔新渡戸稲造全集 第 6 巻 教文館 1969 所収 179－466 頁〕
- 新渡戸稲造（1934）：人生読本〔新渡戸稲造全集 第 10 巻 教文館 1969 所収 197－510 頁〕
- 新渡戸稲造（1936）：Lectures on Japan〔新渡戸稲造全集 第 15 巻 教文館 1970 所収 3－368 頁〕〔和訳 新渡戸稲造全集 第 19 巻 教文館 1985 所収 3－452 頁〕
- ジョージ・オーシロ（1992）：新渡戸稲造．国際主義の開拓者．中央大学出版部
- Prange, Klaus (2005): Die vielen Erziehungswissenschaften und die eine Pädagogik. Zum Verhältnis von Erwachsenenbildung und Allgemeiner Pädagogik. In: Report 28(1), 13－22

- 澤柳政太郎（1908）：新渡戸顧問に対する意見〔澤柳政太郎全集 第10巻 国土社 1980 所収 329－330頁〕
- 柴田庄一（2007）：文明批評家としての夏目漱石ならびに「教育者」としての意外な業績、『野分』『それから』とその周辺をめぐって、言語文化論集 28(2) 69－86頁
- 清水康幸（1993）：修養運動と教育〔寺崎昌男編著 近代日本における知の配分と国民統合、第一法規 所収 389－408頁〕
- 武田清子（1960）：教育者としての新渡戸稲造、教育研究 7 47－109頁〔武田清子（1967）：土着と背教、新教出版「新渡戸稲造の人格教育―理念と実践―」として再録 118－178頁〕
- 武田清子（1961）：キリスト教受容の方法とその科学、新渡戸稲造の思想をめぐって、〔武田清子編著 思想史の方法と対象、日本と西欧、創文社 所収 271－318頁〕〔武田清子（1967）：土着と背教、新教出版「伝統的エトスの近代化―新渡戸稲造における土着化のアプローチ―」として再録 27－62頁〕
- 竹内洋（2003）：教養主義の没落、変わりゆくエリート学生文化、中央公論社
- 綱澤満昭（2007）：新渡戸稲造と修養、文芸・芸術・文化 19(1) 1－14頁
- 鶴見俊輔（1960）：日本の折衷主義、新渡戸稲造論、〔近代日本思想史講座 3 発想の諸様式 1960 筑摩書房 所収 183－222頁〕
- 筒井清忠（1995）：日本型「教養」の運命、歴史社会学的考察、岩波書店
- 渡辺かよ子（1997）：近現代日本の修養論、1930年代を中心に、行路社
- 矢内原忠雄（1940）：余の尊敬する人物、〔矢内原忠雄全集 第24巻 岩波書店 1965 所収 1－166頁〕
- 矢内原忠雄（1941）：続 余の尊敬する人物、〔矢内原忠雄全集 第24巻 岩波書店 1965 所収 167－324頁〕